安藤正紀著：『子どもたちの秘密基地』

農文協，1991年３月30日発行，
169ページ，定価1500円。

生活科は従来のどの教科よりも子どもたちや地域の実態をつかむことが重要な教科であろう。そのため生活科をしっかり実践していくとなれば，子どもたちや地域の実態の把握から素材の選定，指導計画の作成，そして実際の活動に至るまで並々ならぬ労力が必要である。しかし，具体的にどのようにすれば子どもたちや地域の把握ができ，どのように指導計画を作成して，実際に活動させていけばよいのかがわからないのであり，現場の教師が最も知りたいと思っているのが実はこの点にあるのではないだろうか。

本書は「遊び」，その中でも子どもたちの世界独特のものである「秘密基地」に焦点をあてた実践を中心に，著者がどのように子どもたちや地域をとらえ，指導計画を立て，実際に子どもたちがどのように活動し，そして著者のねらう子ども像にいかに変容していったかが詳細に描かれており，まさに，生活科をどのように実践していったらよいのかを知る上で大変貴重かつ有益な内容となっている。また，著者の長年のフィールドワーカーとしての地域を見つめる確かな目と，子どもたちの世界にどんどん入り込んで，常に子どもの側から生活科をとらえようとする姿勢で全体が貫かれているのも，生活科に対する見方に重要な示唆を与えてくれる。以下に，内容を紹介したい。

第一部「遊び」を核とした生活科授業の実践では，まず第１章「地域の環境と子どもの生活の現状を知る」で著者が自分の足で学区内を歩きまわり，放課後の子どもたちの姿にじかに接する中で，「自然を遊び相手にする子ども」と「室内でのゲームに熱中する子ども」の存在をつかみ，さらに保育園を参観する中で小学校入学前の子どもたちの姿をつかんでいくまでを述べている。そして第２章「指導計画を作成する」では，第１章でつかんだ子どもたちの実態から目標を設定し，「秘密基地探検」をベースにした指導計画をどのように作成していったかを具体的に述べている。

第３章・４章は本書の核となる実践記録の箇所である。第３章の１年の単元「秘密基地探検をしよう」では，この単元を３回に分けて計７回の探検を行っている。ひとつひとつの探検に子どもたちが熱中し，探検を通して子どもたちが変容していく姿が生き生きと描き出されている。そこでは教師の側にねらいがあっても，ねらいに向って引っ張っていこうとする姿勢は皆無であり，あくまでも子どもが主体的に活動を作り出しているのである。第４章の２年の単元「探検マップを作ろう」では，１年の単元をさらに発展させ，子どもの発達段階を考慮して生活科における地図作りの方法や活用の仕方を示している。また，目標が達成されたかどうかを数値や聞き取りによって検証しているが，生活科でよく問題にされる「評価」を考える上でも参考になるであろう。

第二部「総合学習から生活科へ」では，第５章で総合学習「公園めぐり」の実践から生活科を実践する上での問題点を浮き彫りにしている。第６章では生活科の可能性というテーマで具体例を出しながら，生活科は机上の空論であってはならず，教師が「ともかくやってみる」という姿勢であることが大切であると述べている。

著者は「まえがき」で生活科の取り組み方として「地域を歩き回ること」をまず挙げている。そして目の前にいる子どもたちに学ぶ姿勢の大切さを強調している。本書は生活科を前向きに考えていこうとされている多くの先生方にぜひ一読をお薦めしたい好著である。　（萩原　孝）